

## 2021年度運用益事業（研究事業）に関する研究報告書

事業名	交通事故等の遺族による被害者の生きた証を伝承する活動が心のケアに寄与する影響に関する調査 —いのちのメッセージ展 in 関学開催とその効果検証—
報告者	坂口幸弘・赤田ちづる

### 報告内容

1. 目的と方法 ※研究の目的と方法（当年度分 or 研究の全体）に関して記載ください。

#### <目的>

交通事故等の遺族による被害者の生きた証を伝承する活動の一つである「生命のメッセージ展」を開催し、来場した大学生へ及ぼす影響を明らかにする。

#### <方法>

来場者調査（Googleform を用いたオンライン調査）

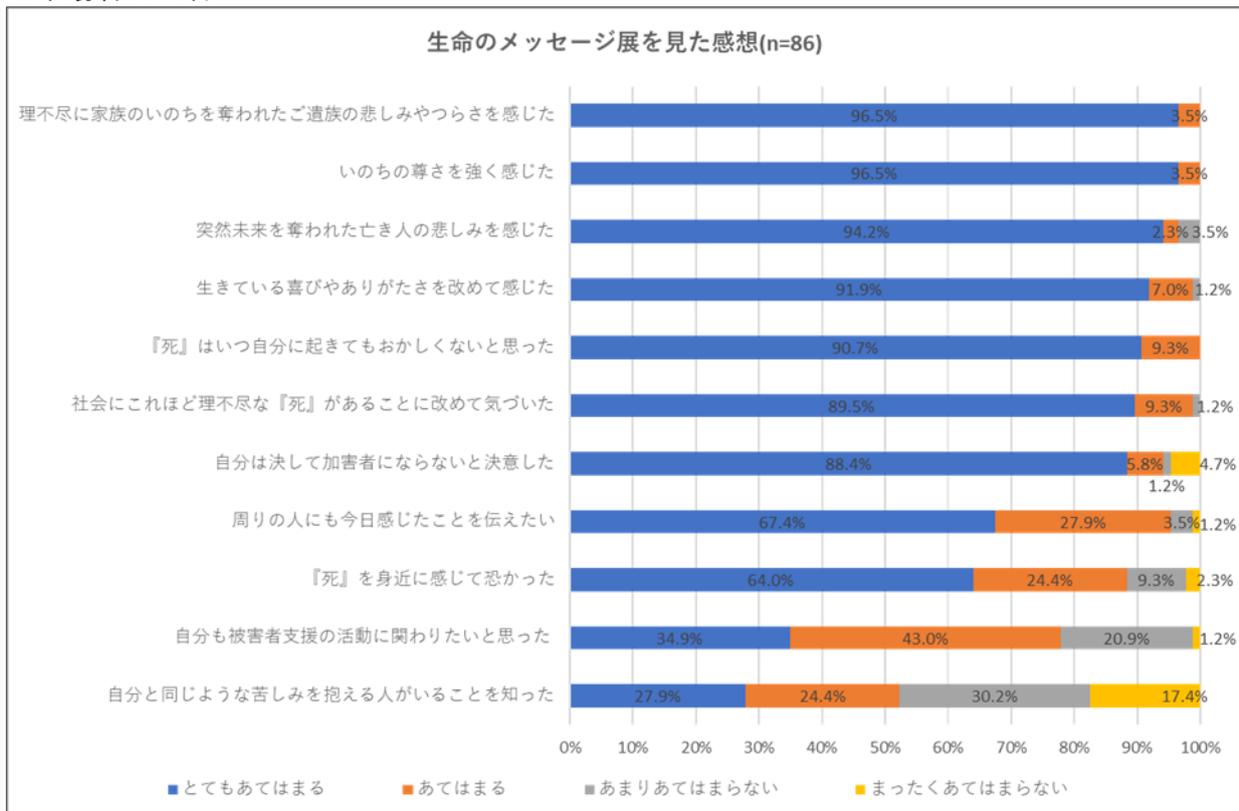
2. 実施した内容と結果 ※具体的に研究した内容と結果を記載してください。

#### <実施した内容>

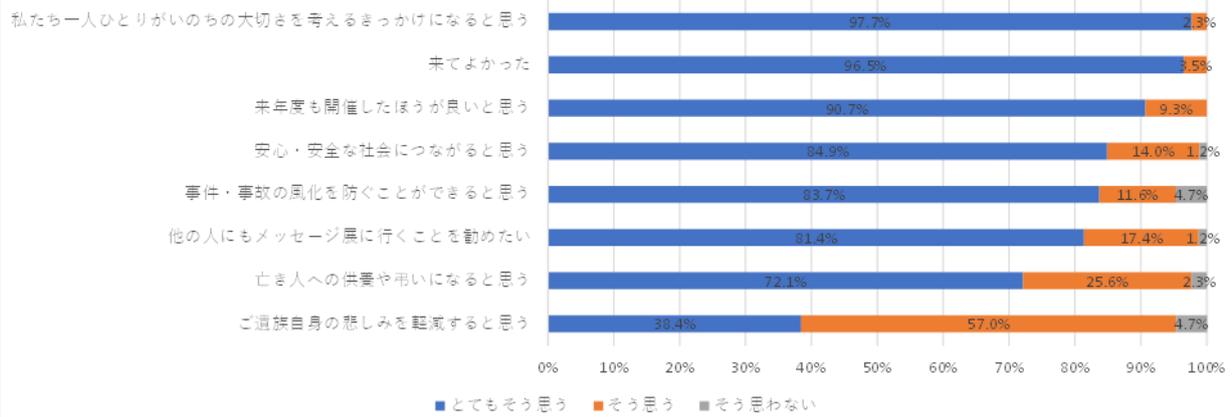
- ・生命のメッセージ展 in 関学の開催
- ・来場者調査

#### <結果>

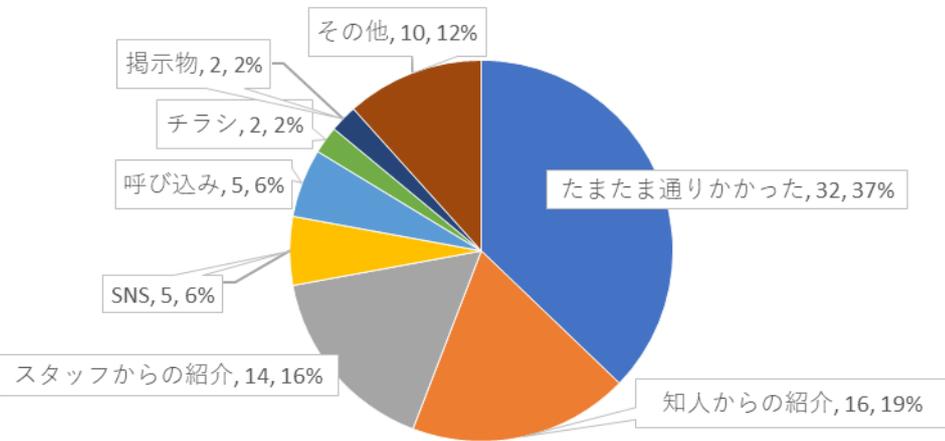
- ・来場者 169 名



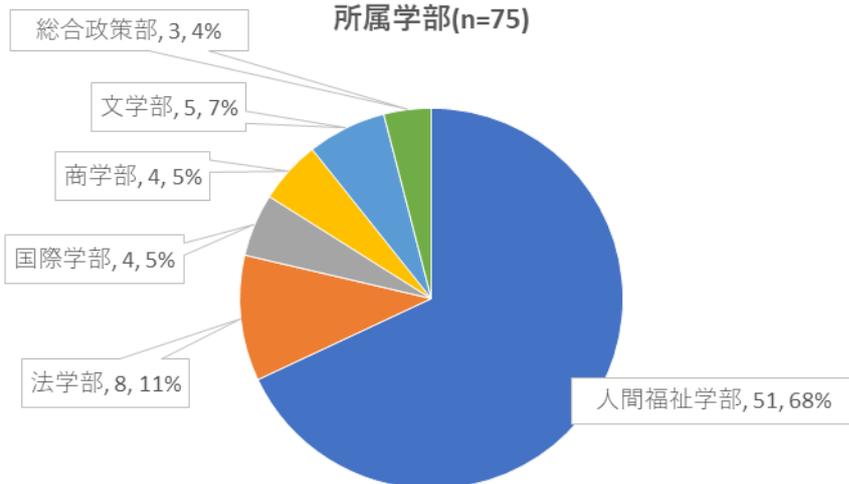
### 生命のメッセージ展の意義(n=86)



### 生命のメッセージ展のことを何で知りましたか(n=86)



### 所属学部(n=75)



自由記述より

- ・今私たちが生きていることが本当に素晴らしく美しく、幸せなことだと思えました。
- ・身長と同じ高さのパネルや靴を見ていのちの重さを深く感じる事が出来た。
- ・今のこの時をより大切に生きねばと思いました。
- ・命の大切さに気づくことができました。今を精一杯生きます。
- ・命は思いがけない時に、突然なくなってしまうのだと知りました。
- ・絶対に自分が加害者にならないようにしようと思いました。
- ・被害者遺族の声も切実で苦しい。日々を大切に生きたいです。
- ・新たな犠牲者を生み出さないようにみんなの意識が変わってほしい。
- ・私にとって当たり前の1日は誰かが生きたかった1日だと痛感しました。
- ・亡くなってからもその命は忘れない限り永久に不滅なのだと感じた。
- ・私の命は決して自分のものではないことに改めて気付きました。
- ・いのちは突然奪われるのだと、とても苦しくなりました。
- ・自分の家族や友人などの大切な人との関係と改めて考え直す機会となった。
- ・大切な人を大切にしようと思いました。
- ・命の大切さを感じてもらえる機会に出会えたことを嬉しく思います。
- ・いのちの大切さを学ぶ上で、人から話を聞くことより大事だと思った。

3. 結果等を踏まえた考察 ※2. で得た結果を受け、どのような気づきがあったか記載してください。

<考察>

今年度の「生命のメッセージ展 in 関学」は、169名の学生が来場した。コロナ禍で、対面授業が制限される中であったが、毎年継続することで、先生方から授業の中で学生に周知して下さる様子も見受けられた。

生命のメッセージ展を見た感想としては、すべての来場者が、「理不尽に家族のいのちを奪われたご遺族の悲しみやつらさを感じた」「いのちの尊さを強く感じた」と回答しており、学生たちが自身や大切な人の生と死について考える機会になったことが伺えた。一方で、9割近い学生が、「死を身近に感じて怖かった」と回答しており、開催の場所・展示の方法などについては、検討する余地があると考えられる。

また、メッセージ展の意義としては、すべての来場者が、「私たち一人ひとりがいのちの大切さを考えるきっかけになると思う」と評価し、「来てよかった」「来年度も開催したほうが良い」と回答しており、学生たちにとって有意義な時間であったことが推察される。

4. 結論・今後のスケジュール ※1～3. を踏まえ、結論や今後の研究の方針（研究後の展開）を記載してください。

<結論>

被害者遺族の「生きた証を伝承する活動」の一つである生命のメッセージ展は、大学生にとっても、自身や他者の命について考える貴重な機会であることが示された。また、毎年続けて開催することの大切さを感じることもでき、次年度からも可能な限り継続していきたいと考えている。

5. その他留意事項 ※計画どおり進捗していない場合の要因や、その他損保協会が知っておくべき事項があれば記載してください。

## 2021年度運用益事業（研究事業）に関する研究報告書

事業名	交通事故等の遺族による被害者の生きた証を伝承する活動が心のケアに寄与する影響に関する調査 —コロナ禍における事故遺族自助グループへの活動支援の効果—
報告者	坂口幸弘・赤田ちづる
<b>報告内容</b>	
1. 目的と方法 ※研究の目的と方法（当年度分 or 研究の全体）に関して記載ください。	
<p>&lt;目的&gt; 交通事故等の遺族による被害者の生きた証を伝承する活動に取り組む自助グループへの活動支援を行い、活動における困難点の改善を図る。</p> <p>&lt;方法&gt; アクション・リサーチ</p>	
2. 実施した内容と結果 ※具体的に研究した内容と結果を記載してください。	
<p>・現在もアクションリサーチ進行中のため、ここでは1団体の状況のみ報告する。 &lt;対象&gt;被害者の生きた証を伝承する活動に取り組む事故遺族自助グループ</p> <p>&lt;実施した内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自助グループメンバーへのヒアリング調査</li> <li>・現状と課題の整理</li> <li>・組織の再編成</li> <li>・運営会議、定例会等への参加</li> </ul> <p>&lt;結果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自助グループメンバーへのヒアリング調査 活動支援を始めるにあたって会員全員18名にヒアリング調査を行い、現状を把握し、課題を整理した。</li> </ul>	
現状	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・代表の負担が大きい</li> <li>・代表が全てを管理しているため、あまりわからない</li> <li>・コロナ禍で活動に参加しにくい</li> <li>・会の中に遺族ヒエラルキーがあり、思うことが言えない</li> <li>・啓発や支援など、やりたいことはたくさんあるが、やり方がわからない</li> <li>・自分たちのケアもしてほしい</li> <li>・裁判のことやグリーフのことなどを勉強したい</li> <li>・活動資金がない</li> <li>・人が集まらない</li> <li>・各種、資料の書き方などがわからず時間がかかる</li> <li>・活動には参加したいが、体調が不安定でなかなかできない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織の編成</li> <li>・活動形態の見直し</li> <li>・活動の提案と方法の検討</li> <li>・グリーフケアの提供</li> <li>・心理教育的支援</li> <li>・資金獲得の方法</li> <li>・会計、事務作業の補助</li> </ul>
<p>ヒアリング調査の結果から、まずは自助グループが組織として運営できるように、これまでの状況を見直し、代表に加え、共同代表、副代表、会計、渉外担当、の役職を設け、今まで代表が担っていた役割を分配した。そのうえで、1年間の活動計画（定例会6回・交通安全啓発活動1回・研修会への参加等）を立て、全員で共有した。</p> <p>活動形態の見直しとしては、会の参加者の居住区域が広いことから、オンライン開催へ変更し、オンラインで定例会に参加できるように個別に接続の方法等の支援を実施した。また、「会の中に遺族ヒエラルキーがあり、思うことが言えない」、「啓発や支援など、やりたいことはたくさんあるが、やり方がわからない」等の意見があったため、1回目の定例会では、それぞれ</p>	

の活動に対する思いを共有し、年間計画の中にそれぞれの希望を盛り込むことができるように調整し、適宜相談しながら修正を繰り返した。「自分たちのケアもしてほしい」との意見が多かったため、報告者との面談は適宜持てることを伝え、オンラインで個別に対応した。会に登録している遺族のうち、半数が利用し、継続している。心理教育的支援については、報告者らの実施している研修会への参加を促したほか、定例会の中で報告者が、自助グループの運営や一般的なグリーフやグリーフケアの考え方、セルフケアについて講義した。資金獲得の方法や、会計・事務作業の業務についても、担当者と連絡を密にしながら取り組み、定例会ごとに会員にも共有するようになった。

### 3. 結果等を踏まえた考察 ※2. で得た結果を受け、どのような気づきがあったか記載してください。

当事者が立ち上げた自助グループは、運営上、さまざまな課題を抱えていることも多く、グループの継続が困難になる場合も多い。本研究で紹介しているグループは、設立8年目の団体であり、これまでは課題も抱えながら運営してきたが、コロナ禍においてこれまでの活動が制限され、運営に支障が出るようになった。

2022年度からも継続して介入中で評価測定はできていないため、ここでの考察は報告者の主観であるが、報告者が介入するようになったことで、会員の活動に対する取り組み方が変化したと感じている。会員の活動に対する取り組み方が変化した要因のひとつは、組織としての役割を分担したことであろう。これにより、それぞれの会員が自助グループの運営に興味を持つようになった。また、会の運営や活動も、会員一人ひとりの意見を聞きながら立案・企画することで、それぞれの会員の満足度が高まっていることも挙げられる。今年度は、会員の発案により、地元新聞社へ対し、二次被害を防止するための報道のあり方に対する意見文書の提出も行った。それに対し、地元新聞社も丁寧にヒアリングしてくださり、ともに報道のあり方を考えるプロジェクトの立ち上げも検討中である。さらに、一般的なグリーフやグリーフケアの考え方の知識を得ることで、自分以外の会員の持つグリーフへの理解が高まってきたようにも見受けられる。

これまでの報告者らの研究で、当事者遺族の活動は、当事者遺族の回復プロセスに有益なことが示されており、その活動をいかに支えていくかが課題の一つであった。長期的な視点で自助グループにかかわり、見守っていききたいと考えている。

### 4. 結論・今後のスケジュール ※1～3. を踏まえ、結論や今後の研究の方針（研究後の展開）を記載してください。

当事者と研究者が共に取り組むアクションリサーチという実践研究は、短期的なものではないため、2022年度も引き続き取り組んでいきたいと考えている。現在、今年度の活動計画の立案中であるが、昨年度よりも明らかに活動に対する意欲が高まり、活動が会員の生きる目的の一つになり得る可能性があることを窺うことができる。2021年度の報告としては、活動の現状報告に留まったが、今後は自助グループに研究者が介入することの効果等も測定していきたいと考えている。

### 5. その他留意事項 ※計画どおり進捗していない場合の要因や、その他損保協会が知っておくべき事項があれば記載してください。

以上

<b>研究課題</b>	
交通事故等の遺族による被害者等の生きた証を伝承する活動が心のケアに寄与する影響に関する調査	
<b>研究の概要</b>	
1. 交通事故等で遺されたきょうだいに関する探索研究	
目的	本研究では、犯罪・事故によってきょうだいとの死別体験を持つ遺されたきょうだいに着目し、親の悲嘆が遺されたきょうだいに影響する可能性を検討し、きょうだいの死が、家族機能、特に親子関係に与えた影響を双方の視点から検証することを目的とした。
対象	交通関係業過を含む犯罪被害によってきょうだいを亡くした親と子（きょうだい）それぞれ 148 名を対象とし、自記式質問紙調査による量的探索的研究デザインで実施した。育った家族の影響を大きく受ける成年前期までに、交通関係業過を含む犯罪被害によるきょうだいとの死別体験を持ち、調査時において 18 歳以上の遺されたきょうだいを対象とした。
成果	<p>1) 学会発表</p> <p>a. 赤田ちづる・坂口幸弘「きょうだいとの死別体験が遺されたきょうだいと親子関係に及ぼす影響の探索」日本グリーフ&amp;ビリーブメント学会，2021，オンライン ⇒<a href="#">抄録.pdf</a></p> <p>2) 学術論文</p> <p>a. 赤田ちづる・坂口幸弘. (2022). 犯罪によるきょうだいとの死別—親子関係ストレスと心理的反応に関する検討—. グリーフ&amp;ビリーブメント研究, 3, 89-102 ⇒本文（準備中）</p> <p>b. Akata C., Sakaguchi Y. (2022). Sibling bereavement following a crime: Grief perceptions of parents and bereaved children (submitted to Journal of Loss and Trauma ) ⇒本文（準備中）</p> <p>c. 赤田ちづる・坂口幸弘. (2022). 犯罪被害で亡くなった子どもの親ときょうだいにおける家族機能評価と精神健康との関連. 心的トラウマ研究, 18 (印刷中) ⇒本文（準備中）</p>

2. 生きた証を伝承する活動に携わる被害者団体のコロナ禍における活動の実態調査	
目的と対象	本研究では、コロナ禍における遺族支援団体活動の実態を明らかにし、課題を提示し、支援方策の検討を行うことを目的とした。調査対象は、「犯罪被害者団体ネットワーク：ハートバンド」に所属する遺族支援団体の代表者とし、Google フォームを用いたオンライン調査を実施した。
成果	<p>1) 学術論文</p> <p>a. 坂口幸弘・赤田ちづる. (2021). コロナ禍における死別 -新たな遺族支援の展開を探る-. 人間福祉学研究 14-1, 57-73 ⇒<a href="#">本文</a></p>
3. 交通事故遺族による「亡き人の生きた証を伝承する活動」が及ぼす効果	
目的	死者の生きた証を伝承する活動が、社会に与える効果を測定し、死者の生きた証を伝承する活動の今後のあり方と活動支援に提言を行うこと
成果	<p>1) 死者の生きた証を伝承する活動における活動支援</p> <p>a. 2019 年度「生命のメッセージ展 in 神戸」の開催及び来場者調査 ⇒<a href="#">報告書</a></p> <p>b. 2020 年度「生命のメッセージ展 in 関学」の開催及び来場者調査</p> <p>c. 2021 年度「生命のメッセージ展 in 関学」の開催及び来場者調査 ⇒<a href="#">報告書</a></p> <p>d. 2019 年度 トヨタ自動車北海道株式会社における生命のメッセージ展に関する調査 ⇒<a href="#">報告書</a></p> <p>2) 学術論文</p> <p>a. 坂口幸弘. (2020). 遺された者の悲嘆と死者の尊厳 兵庫県人権啓発協会研究紀要第二十一輯. 81-105 ⇒<a href="#">本文</a></p> <p>b. 赤田ちづる・坂口幸弘. (2021). 遺族による死者の生きた証を伝承する活動の意義 -NPO 法人いのちのミュージアムが少年院で取り組む「いのちの授業」が在院者へ及ぼす効果- 関西学院大学人間福祉学部 HumanWelfare13-1, 89-96 ⇒<a href="#">本文</a></p> <p>3) 書籍</p> <p>a. 坂口幸弘 「喪失学－「ロス後」をどう生きるか?」 光文社新書 2019.6</p>